高適「自淇渉黄河途中作十三首」について―「淇上の高適」補稿―

川口喜治
Yoshiharu KAWAGUCHI

論者は以前に、高適の淇上（淇水のほとり）の別業寓居について、別業の位置・別業経営の様相・寓居の時期・淇上という土地を選択した理由などについて考察するとともに、その時期の文学を特に交遊という視点から検討した。(1)

本稿は、そのとき紙幅の都合で概要のみに触れるにとどまった「自淇渉黄河途中作（淇自り黄河を渉る途中の作）十三首」（以下「自淇渉黄河」詩と略称）について紹介せんとするものである。

＊

「自淇渉黄河」詩が制作されるまでの経緯については、詳しくは前稿に譲ることとし、いまごく簡単に述べると、高適は第一次薊北行を終えたあと、開元二三年（七三五）に長安に赴き制科を受験するも落第し、その年あるいは翌年から淇上の別業に寓居し始める。これは隠棲のようなかたちでもあったが、一方で、淇上が王侯・貴族・高級官僚などの有力者との交遊機会が多い土地であることを考えると、高適は、この時期にも政界の有力者へのパイプや科挙受験のための推薦を求めて、いわゆる就職活動を続けていたと推測できる。

ただ、前稿で検討したように、淇上における就職活動はさほど成果があがらなかったようで、高適は淇上寓居を数年で切り上げ、淇水を経て黄河を渉って南岸の滑台（滑州の治所・白馬県（河南省滑県付近）の州城）に至り、その後住み慣れた宋州へ戻ってゆく。このときの行程で作られたのが、「自淇渉黄河」詩である。

なお、淇水は、山西省陵川県あたりを源に東流し、河南省鶴壁市の南方で南に向かい、当時の永済渠という運河と交差して当時の黄河に入っていた比較的短い河川であり、黄河の流れが南に下がりそれと合流していない点を除けば、現在もその流れをほとんど変えていないようである。また高適の別業の位置は、滑台を黄河の対岸にのぞむ衛州衛県県城の付近で、淇水に臨み、田野や桑林が見渡せる山のふもとに在った。

＊

では、「自淇渉黄河」詩の紹介にうつる。

まず本稿では前稿同様、孫欽善『高適集校注』（一九八四年、上海古籍出版社）を底本とする。

「自淇渉黄河」詩は、全部で十三首。但し孫氏『校注』の底本である明覆宋刊本『高常侍集十巻』（北京図書館蔵・論者未見）や、その系統にある四部叢刊本『高常侍集八巻』（巻二）は、十二首とする。一方、別系統のテクストである『全唐詩』（巻二一二）には一首多く十三首を載せる。前者にない一首は、後者の第十三首であり、孫氏『校注』は、『全唐詩』や、第十三首を含めて連作の内の五首を「自淇渉黄河五

首」なる題で載せる『文苑英華』（巻二九二）[2]などから、これを補い十三首としている。[3]なお論者が使用した中華書局影印本『英華』が五首を載せる巻は宋版である。

ところで前稿で示したように、彭蘭「高適系年考証」（『文史』三、一九六三年）と劉開揚『高適詩集編年箋註』（一九八一年、中華書局）は、十三首を制作順に配列することを試みている。彭氏によれば、高適は別業を離れた後、淇水を進み、黄河に入って北に下って滑台に至り、次に黄河を南に鄭州滎沢県（河南省鄭州市北）付近まで遡って来た、とする。劉氏もそれを襲っている。本稿では、ひとまず彭氏・劉氏の配列に従い十三首を紹介してゆくが、同時にその配列についても検討してみたい。

＊

さて彭氏・劉氏による十三首の配列は、数字のみを示せば、一・二・十二・八・三・四・九・五・十・十一・六（彭氏は連作より除外。これについてはのちに検討する。）・七・十三となっている。[4]

では順に作品を掲げる。

其一

1川上常極目、2世情今已閑。3去帆帶落日、4征路隨長山。
5親友若雲霄、6可望不可攀。7於茲任所愜、8浩蕩風波間。

（1川上　常に目を極め、2世情　今　已に閑なり。3去帆　落日を帶び、4征路　長山に隨う。5親友　雲霄の若く、6望む可けれども攀づる可からず。7茲において愜う所に任せ、8浩蕩たり風波の間。）

一句目、「川上」は淇水のほとり（の別業）。そこでいつも「極目（目路のとどく限り眺める）」したのは、様々な感情が入り混じってのことであろう。[5]この点は、敦煌本『高適詩集残巻』（P3862）が「自淇渉河途中作」と題して其一のみを収め、「常極目」を「恒獨立」に作るのを採ったとしても、かわらないであろう。二句目の「世情（世俗的な感情）」は、ここでは官職に就きひいては栄達富貴を手にしようとする意志であるが、いまやそれは「已閑（おさまってしまった）」であるという。淇上寓居前の長安応試落第と寓居中の就職活動の失敗を踏まえての措辞と考えられる。三句目の「去帆」は高適の乗る舟。それが寂寞たる夕日に照らされているのは、失意の旅立ちであることを示そう。しかもその道のりは長く続く山並みに視界を閉ざされており、明るく開けたものではない。五・六句目、官途に就いている友人たちに追いつく方途が今はないことをいう。末二句、「於茲」は気持ちの切り替えを示し、心の欲するまま風波の中に旅立つことをうたう。「浩蕩」は行く手があてどないことと、自らの気持ちが解き放たれていることを意味し、「風波」は文字通り船旅の風と波であり、またこれから境遇が不安定であることをいおう。全体として、出発に際し、再起に対する強い意志は描かれていない。

其二

1清晨泛中流、2羽族滿汀渚。3黄鵠何處來、4昂藏寡儔侶。
5飛鳴無人見、6飲啄豈得所。7雲漢爾故知、8胡爲不輕舉。

（1清晨　中流に泛かび、2羽族　汀渚に滿つ。3黄鵠　何處よりか來たる、4昂藏　儔侶寡し。5飛鳴　人の見る無く、6飲啄　豈に所を得んや。7雲漢　爾が故知なり、8胡爲れぞ　輕舉せざる。）

「羽族（鳥）」が、みぎわや中洲といった居るべきところを得て群がるのに対して、どこからともなく飛来した「黄鵠（おおとり）」は、「昂藏（意気盛ん）」だが連れだつ友がいない。孤高な黄鵠は、もちろん高適自身の形象であり、飛んだり鳴いたりしても誰からも注目されず、水を飲み餌をついばむ場所さえもおぼつかないというのは、当然、自己の才能が正当に評価されていないことの比喩である。してみると羽

族を、才能・実力もないのにその場所を得ている小人たちの形象とよむこともできよう。末二句は、黄鵠の居るべき（その才能を発揮すべき）場所は実はこんなところなのではなく、遥かに高いところであるはずだという、自己への激励。一首は自らの不遇の状況を鳥に託して描いてはいるが、鳥に託した失意の表現としてよく知られる「垂翼」「垂翅」という視点からの描写ではないところに、高適らしい強い意志の存在を看取できよう。(6)

其十二

1朝景入平川、2川長復垂柳。3遙看魏公墓、4突兀前山後。
5憶昔大業時、6羣雄角奔走。7伊人何電邁、8獨立風塵首。
9傳檄舉敖倉、10擁兵屯洛口。11連營一百萬、12六合如可有。
13方項終比肩、14亂隋將假手。15力爭固難恃、16驕戰曷能久。
17若使學蕭曹、18功名當不朽。

（1朝景　平川に入り、2川長く　復た柳垂る。3遙かに看る　魏公の墓、4突兀たり　前山の後。5憶う　昔　大業の時、6羣雄角いて奔走す。7伊の人　何ぞ電邁なるや、8獨り立つ　風塵の首。9檄を傳えて敖倉を舉げ、10兵を擁して洛口に屯す。11連營　一百萬、12六合　有する可きが如し。13項に方ぶれば　終に比肩し、14隋を亂して　將に手を假さんとす。15力爭　固より恃み難し、16驕戰　曷ぞ能く久しからん。17若使　蕭曹を學べば、18功名　當に不朽なるべし。）

三・四句目、前に見える山の「後（すそ）」に高くそびえる墓の主「魏公」は、李密。隋末群雄のひとりで、煬帝の大業九年（六一三）に挙兵。唐の高祖・李淵に降るも、謀反が発覚して殺された。「前山」は『舊唐書』（巻五三）李密傳に「葬于黎陽山南五里」とあるので、黎陽山である。黎陽山は、黄河北岸の衛州黎陽県（河南省濬県）の南に位置する。つまり高適は、淇水を下り黄河に合流したあと、黄河を滑台の方へ下ったことになる。またいま厳耕望氏による唐代の交通図(7)をたよりにすると、滑台の下流に黎陽県があり、また黎陽県の対岸に白馬津関がありそこから滑台へ陸路が続いているので、高適はいったん滑台を通り過ぎて白馬津関で上陸し、そこから陸路滑台へ向かったと考えられる。

さて一・二句目に「平川」「川長」とあるのは、支流の淇水ではなく、黄河に相応しい描写である。九・十句目については、李密傳に「大業十三年春、密與（翟）讓**領精兵**千人出陽城北、踰方山、自羅口襲**興洛倉**、破之。……襄於是推密爲主、號爲**魏公**。……於是城**洛口**周迴四十里以居之。……密復下**迴洛倉**而據之、大修營塹、以逼東都、仍**作書以移郡縣**曰、……」とある。九句目の「敖倉」は李密の事跡には見えない。史実としては、句の「傳檄」と伝の「作書以移郡縣」が対応することから、伝の「迴洛倉」か。迴洛倉は「洛口」（河南省鞏県東北）近くの迴洛城（河南省鞏県西北）にあった。(8)なお敖倉を詩に詠み込んだ理由は待考。(9)またさらに詮索するならば、十句目の「洛口」は敖倉との対応からすれば、「洛口倉」を指すとも考えられる。(10)洛口倉は伝中の「興洛倉」に同じであり、(11)穀倉を占拠することが戦略的に極めて重要であることを考えれば、この方が自然であろう。続く四句、李密の勢いは「六合（天地四方、天下）」をとったかのようであり、それは項羽と比肩することができ、隋を混乱させるのに李淵に手を貸したと、その功績を讃える。それと同時に、李密の運命が項羽と同じいことをも示していよう。なお項羽の名が出るのは、伝の別の箇所に見える、李密が『漢書』の項羽伝を耽読していたというエピソードに拠ろう。(12)十五・六句目、成功を収めるには力だけを頼りにしていてはいけないというのは、司馬遷が項羽を「自矜功伐、奮其私智而不師古、謂霸王之業、欲以力征經營天下、五年卒亡其國、身死東城、尚不覺寤而不自責、過矣。」（『史記』巻七・項羽本紀）と評したのを受けよう。末二

句、李密が劉邦の功臣として歴史に名をとどめた蕭何・曹参に学んでいたなら、李淵に帰順したあとまた叛して殺されることはなく、その名を不朽のものとできたのにと惜しんでいる。また伝には李密が魏公を名乗る以前、楊玄感と起こした叛乱に失敗して潜伏していた時の五言詩を載せ、その末尾には「樊噲市井徒、蕭何刀筆吏。一朝時運會、千古傳名謚。寄言世上雄、虚生眞可愧。」とあり、末二句がこれを踏まえているならば、李密は蕭何を讃えながらも肝要な部分を学んでいなかったという意味も出てくるだろう。なお末二句は、山内春夫氏が杜牧の詠史詩の特徴として指摘された「史実を仮定の上にたって捉え、起こらなかったことを空想し期待する逆説の詠史詩」の手法に似通う点でも興味深い。[13]

其八

1茲川方悠邈、2雲沙無前後。3古堰對河壖、4長林出淇口。
5獨行非吾意、6東向日已久。7憂來誰得知、8且酌罇中酒。

（1茲の川　方に悠邈、2雲沙　前後無し。3古堰　河壖に對し、4長林　淇口より出づ。5獨行は吾が意にあらず、6東向　日に已に久し。7憂來りて　誰か知るを得んや、8且く罇中の酒を酌まん。）

一句目は、黄河が「方に（今や、今はじめて）」果てしなく広がり続く様を見せはじめた情景を描いていよう。二句目、孫氏『校注』は、「空の雲と砂岸が先を競って伸びてゆき、前方も後方も、地平線で交じりあっている（天雲岸沙競相延伸、不分前後、會合於天邊）。」と説き、『漢語大詞典』「雲沙」の項もこの語釈をそのまま採用している。[14]三句目、「古堰」は、曹操が建安九年（二〇四）に淇水の口に枋という木で築いた堰。[15]「河壖」は川べりの土地。五句目の「獨行」は、高適詩にはここをあわせて五例見られ、四例がいずれも自らの失意・不遇のひとり旅を意味している。またそれを「吾が意にあらず」と自己確認し、直截に表現するのは高適らしいと思われる。[16]そして末句、その憂さを酒ではらして終わる。なお詩の配列について、淇水を出て黄河の下流にある滑台に向かう水路では、この詩の四句目の「淇（水）口」が其十二の魏公墓がある黎陽山より上流に位置するので、其八は其十二の前に置くのがよいと考えられる。

其三

1野人頭盡白、2與我忽相訪。3手持青竹竿、4日暮淇水上。
5雖老美容色、6雖貧亦閑放。7釣魚三十年、8中心無所向。

（1野人　頭　盡く白し、2我に忽ち相訪ぬ。3手に青竹の竿を持つ、4日暮　淇水の上。5老ゆと雖も容色美しく、6貧しと雖も亦た閑放なり。7釣魚　三十年、8中心　向うところ無し。）

「野人（在野の隠者・知識人）」との交流のうたう。六句目「閑放」は、何ものにもとらわれず自由自在なこと。末句の「向（追い求める）」は、ここでは世俗的な名利を追求すること。総じて野人の処世に対する評価は直接表現されていない。連作の他の作品が自己の所懐を叙するなかで、この作品は、突きはなしたような第三者的描写に徹しているのが特徴といえる。それがかえって高適の、隠逸行為に対する本質的な共感の薄さを表しているのではなかろうか。[17]

ところでこの詩は、四句目によると、野人が高適の別業を訪れたと解するのが自然であろうが、そうなると「自淇渉黄河途中作」という詩題と齟齬を来たす。連作の一つとするならば、旅路の途中に野人が訪ねてきたと解するしかあるまい（待考）。ただそうすると淇水での作品であるので、其八・十二の前に置くべきであろう。

其四

1南登滑臺上、2却望河淇間。3行樹夾流水、4孤城對遠山。
5念茲川路闊、6羨爾沙鷗閑。7長想別離處、8猶無音信還。

（1南して滑臺の上に登り、2却って河淇の間を望む。3行樹　流

水を夾み、4孤城　遠山に對す。5茲の川路の闊(ひろ)きを念い、6爾ら沙鷗の閑なるを羨む。7長く別離の處を想えども、8猶お音信の還る無し。）

滑州の治所・白馬県に到着した後の作。滑台は、その州城（＝白馬県城）。『元和郡縣圖志』（巻八）河南道四・滑州・白馬縣に「州城、即古滑臺城。城有三重、又有都城、周二十里。相傳云衛靈公所築小城、昔滑氏爲壘、後人增以爲城、其高峻堅險。臨河亦有臺。……」とあり、州城はかなり高い場所にあった。そこから淇水が黄河に合流するあたりを望んでうたう。初めに「南して」というのは滑台が黄河の南岸にあるからであるが、詳しくは其十二で述べたように白馬津から陸路滑台へ南下したことを示そう。三・四句目、「行樹」は並び続いている樹木、「孤城」は高適の別業あたりのまち、すなわち衛県城を指すと思われる。してみると「遠山」は、前稿で扱った「淇上別業」（五七頁）に「依依西山下、別業桑林邊。」とある「西山」か。なお『文苑英華』では「孤城」を「孤村」に作り、それに従うならば孤村は黄河沿岸の村となろうか。六句目の「沙鷗」は自由・気ままの象徴。それを羨むのは、詩人の意識が既に世俗へと入り込んでしまっていることを示そう。五句目は、下句の沙鷗の呑気さに対して自らの前途の茫漠さをいうか（待考）。末二句、「別離處」はこの船旅の出発地、すなわち淇上の別業。そこからの音信を期待するのは、就職に関わる何らかの知らせ、あるいは別業の親類・知人からのたよりを待ってのことかと思われる。

其九

1朝從北岸來、2泊船南河滸。3試共野人言、4深覺農夫苦。
5去秋雖薄熟、6今夏猶未雨。7耕耘日勤勞、8租稅兼舄鹵。
9園蔬空寥落、10産業不足數。11尚有獻芹心、12無因見明主。

（1朝に北岸従(よ)り來り、2船を南河の滸に泊む。3試みに野人と共に言えば、4深く農夫の苦しみを覺ゆ。5去秋　熟すること薄しと雖も、6今夏　猶お未だ雨ふらず。7耕耘　日に勤勞し、8租稅　舄鹵(せきろ)を兼ぬ。9園蔬　空しく寥落たり、10産業　數うるに足らず。11尚お獻芹の心有れども、12明主に見(まみ)ゆるに因(よし)無し。）

まず詩の配列であるが、冒頭二句の黄河の北岸から南岸に着いたとの描写から、少なくとも滑台に到着している其四より前に置かなければなるまい。三・四句目は、「野人（在野の知識人）」から農民の苦しみを聞いたということであろうが、野人も同時に農業に従事しているのであろう。五句目、「薄熟」は常套の語彙ではないようであるが、ここでは少しはみのりがあったという意味であろう。続いて、日照りの続く中、日々勤労するが、苛酷にも「舄鹵（塩分が多く痩せた土地）」にも租税がかけられることをいう。九・十句目、畑の野菜は努力の甲斐なく出来が悪く、「産業（生活維持のためのなりわい）」も言うに足りない有様である。末二句は、農民の代弁者ともいうべき野人が、凶作にもかかわらずなお「獻芹（わずかなものでも献上する）」の気持ちがあるのだが、それを直接天子に伝えるすべを持たないことをいう。[18]

ところで入谷仙介博士はこの作品について「王維、儲光羲とは別の観点から農民に対した詩人」として高適を位置づけ、「王績から王維にと展開してきた田園詩の、杜甫、白居易的な社会詩への脱皮の過程を跡づける上で、重要な意義を持つ。」とつとに評価されている。[19] また、野人・農民が不作と重税を嘆きながらも、なお皇帝への献身を忘れていないというところが、杜甫・白居易の社会詩が民衆の惨状を追求して描くのとは違っており、注意すべきであろうが、ここでは紙幅の関係もあり、その指摘だけにとどめたい。

其五

1東入黄河水、2茫茫汎紆直。3北望太行山、4峨峨半天色。
5山河相映帶、6深淺未可測。7自昔有賢才、8相逢不相識。

（1東して黄河の水に入り、2茫茫　紆直に汎(うか)ぶ。3北のかた太

行山を望べば、4峨峨たり　半天の色（峨峨として天色に半ばす）。5山河　相映帯し、6深淺　未だ測る可からず。7昔より賢才有り、8相逢うも相識らず。）

彭氏は滑州の作、劉氏・孫氏はともに其四同様滑台に登っての作品とする。また劉氏は二句目の「汎」を「在滑臺見黄河泛流（水が流れる）」と解する。確かに中間四句の風景は、高所からの眺望とも思える。ただそうなると一句目は「東に入る（流れてゆく）黄河の水」と訓むことになろうが、少し無理があるように思われる。なお三氏は『太平寰宇記』（巻九）河南道九・滑州・白馬縣の「述征記云、登滑臺城、西北望太行山、白鹿巖・王莽嶺冠於衆山表也。[21]」という記述を三句目に関連づけて、滑州・滑台の作としているようだが、説得力に欠けよう。ここは訓読に示したように解し、淇水から、果てしなく広がる曲直たる黄河に出たときの作とする。してみると配列は、其八・十二の前となろう。また中間四句は、北のかた空の半分を占めるほど雄大な太行山を、黄河に泛かんで望んだ風景であるとしても問題なかろう。一首、自然の雄大さが計り知れないように、賢才を識ることは難しい、と唐突に終わる。これはやはり、詩人の自負とその才能を見抜ける人物がいないという不遇の現況を示していよう。

其十

1茫茫濁河注、2懐古臨河濱。3禹功本豁達、4漢跡方因循。
5坎徳昔滂沱、6馮夷胡不仁。7渤潏隄防、8東郡多悲辛。
9天子忽驚悼、10従官皆負薪。11畚築豈無謀、12祈禱如有神。
13宣房今安在、14高岸空嶙峋。15我行倦風湍、16輟棹將問津。
17空傳歌瓠子、18感慨獨愁人。

（1茫茫として濁河注れ、2懐古　河濱に臨む。3禹功　本より豁達、4漢跡　方に因循す。5坎徳　昔　滂沱、6馮夷　胡ぞ不仁なるや。7渤潏　隄防を陵ぎ、8東郡　多く悲辛す。9天子　忽ち驚悼し、10従官　皆薪を負う。11畚築　豈に無謀ならんや、12祈禱　神有るが如し。13宣房　今　安にか在る、14高岸　空しく嶙峋たり。15我が行　風湍に倦み、16棹を輟めて　將に津を問わんとす。17空しく瓠子を傳え歌う、18感慨　獨り人を愁えしむ。）

まず、本稿の底本孫氏『校注』（従ってその底本も）やその系統の四部叢刊本、また『全唐詩』では、末四句を、次に配列される其十一の冒頭四句としている。一方、底本と別系統のテクストのうち論者が目睹可能な文淵閣四庫全書本『高常侍集』（巻三）では、右に掲げた通りとなっている。[22]また『文苑英華』は、この詩は採らないが其十一を五首のうちの第四首として載せ、そこでは問題の四句を冒頭に配していない。つまり四庫全書本と同様、其十一は次に掲げるように「孟夏」の句からはじまる計八句からなる。また劉氏『箋注』は四部叢刊本を底本としながらも、右に掲げたように区切っている。そうすれば十七句目が内容的に上とつながり、また十六句目の韻字「津」が次の其十一の二句目の韻字「津」と重複しなくなる。よってここでは、本稿底本の孫氏『校注』には従わず、右に掲げた通りとする。

さて三・四句目、禹の治水の功績はもとより極めて偉大であり、漢の治水跡もそれを継承したものであると歌い、以下具体的に、漢代の黄河の決壊と武帝による治水をうたう。これは『史記』（巻二九）河渠書の以下の記述に基づくであろう。「漢興三十九年、孝文帝時河決酸棗、東潰金隄、於是**東郡**大興卒塞之。其後四十有餘年、今天子（武帝）元光之中、而河決於**瓠子**、東南注鉅野、通於淮・泗。於是天子使汲黯・鄭當時興人徒塞之、輒復壞。……自河決瓠子後二十餘歲、歲因以數不登、而梁楚之地尤甚。天子既封禪巡祭山川、其明年、旱、乾封少雨。天子乃使汲仁・郭昌發卒數萬人塞瓠子決。於是天子已用事萬里沙、則還自臨決河、沈白馬玉璧于河、令羣臣**從官**自將軍已下皆**負薪**實決河。是時東郡燒草、以故薪柴少、而下淇園之竹以爲楗。天子既臨河決、悼

功之不成、乃作歌曰、瓠子決兮將柰何、……歸舊川兮神哉沛、不封禪兮安知外。爲我謂**河伯兮何不仁**、泛濫不止兮愁吾人。……於是卒塞瓠子、築宮其上、名**宣房宮**。而道河北行二渠、**復禹舊迹**、而梁・楚之地復寧、無水災。」

五句目の「坎徳」はここでは水のこと（『易』説卦傳「坎者水也、正北方之卦也。」「坎爲水。」[23]）。六句目の「馮夷」は河伯（『廣雅』釋天「河伯、謂之馮夷。」）で河の神。この句は右の記事中の武帝の歌辞に基づく。七・八句目、「渤潏」は水の沸きたつさま。「東郡」は漢代の郡で、治所は濮陽（河南省濮陽県南）、その北に黄河が決壊した場所・瓠子がある。また唐代の滑台（白馬県）は漢の東郡の領域内に位置し、濮陽の西南。十句目「從官負薪」は右に引いた記事に見える。次の「畚築」は土を盛って運ぶふごと土をつき固める杵、つまり土木作業の道具であるが、右の記事や同様の記事を載せる『漢書』（巻二九）溝洫志に畚築のことは見当たらない。十二句目は祈禱（とその結果）が神がかりであったことをいう。十三句目、「宣房」は治水成功後そこに建てられた宮殿。十五句目は水の旅路が「風湍（風や急流）」に苦しめられたことをいう。

詩全体としては、いにしえの偉大な皇帝による治水事業の成功を記念する宮殿が時の流れに失われ、ただその時の皇帝の歌だけが伝わっているだけという典型的な懐古の詩といえようが、歌が朽ちずに伝わっているというところに、詩歌に対する詩人の肯定的価値観が垣間見られる。なお詩の配列は、滑台あたりにまつわる故事が歌われており、また十五・六句目より滑台到着前であることがわかるので、其九のあたりに置くべきであろう。

其十一

1孟夏桑葉肥、2穠陰夾長津。3蠶農有時節、4田野無閑人。
5臨水狎漁樵、6望山懷隱淪。7誰能去京洛、8顦顇對風塵。

（1孟夏　桑葉肥え、2穠陰　長津を夾む。3蠶農　時節有りて、4田野　閑人無し。5水に臨みて漁樵に狎れ、6山を望みて隱淪を懷う。7誰か能く京洛に去き、8顦顇して風塵に對せん。）

前半は初夏の農事や養蚕が繁忙の時期に入ったことをうたう。二句目、「穠陰」は常套の語ではないようだが、ここでは桑の木が鬱蒼と茂っている様子をいい、それが「長津（長い河川）」の両岸に続いていることをいう。後半は、山水での隠者の生活に対する思いと、それとは正反対の「京洛（洛陽。ここではひろく長安も指そう）」での「風塵（官途を中心とする世俗の生活）」への嫌悪がうたわれる。連作中、何時の作であるか決め手に欠けるが、前半に桑林と養蚕（前稿（上）参照）が描写されていること、隠逸への思いがうたわれていること、其九の干ばつによる農業不振の内容とはことなることなどから、淇上の別業近くにおける作品と考えられる。淇上での作品が連作に誤って混入した可能性もあろうが、前述のように『文苑英華』にも採られており、ここでは連作の一つと見做す。ならば、この旅の出発直後の作品と思われる。それならば後半四句からは、淇上の別業生活における脱俗性を慕いつつも、そこを離れて旅立とうとするが、世俗の極みともいうべき京都（みやこ）は避けたいという、複雑な心境が読み取れよう。

其六

1秋日登滑臺、2臺高秋已暮。3獨行既未愜、4懷土悵無趣。
5晉宋何蕭條、6羌胡散馳騖。7當時無戰略、8此地即邊戍。
9兵革徒自勤、10山河孰云固。11乘閒喜臨眺、12感物傷遊寓。
13惆悵落日前、14飄颻遠帆處。15北風吹萬里、16南雁不知數。
17歸意方浩然、18雲沙更迴互。

（1秋日　滑臺に登り、2臺高く　秋已に暮れぬ。3獨行　既に未だ愜（かな）わず、4懷土　悵として趣無し。5晉宋　何ぞ蕭條たる、6羌胡　散（ほしいまま）に馳騖す。7當時　戰略無く、8此地　即ち邊戍とな

る。9兵革　徒自（いたずら）に勤め、10山河　孰か固しと云う。11閒に乗じて臨眺を喜び、12物に感じて遊寓を傷む。13惆悵　落日の前、14飄颻　遠帆の處。15北風　萬里より吹き、16南雁　數を知らず。17歸意　方に浩然たり、18雲沙　更に迴互す。）

一・二句目の描写と十六句目に「南雁（南に帰る雁）」とあることから、秋分をすぎて秋も後半に入った頃に滑台に登っての作であることがわかる。三句目は、先の其八に「獨行は吾が意にあらず」とあったが、その失意の「獨行」が依然として続いていることを示そう。つまりこれは、滑台において何らかの就職活動を行ったのだが（前稿（下）参照）、成果があがっていないということであろう。失意の状態である以上、四句目、「懷土（故郷をおもう）」も冷然として喜びなきものとなってしまう。

次に、五句目の「晉宋」は東晉と劉宋。六句目は、永嘉の乱以降、華北の五胡十六国時代・北魏の時代を指す。七・八句目、この時代南朝側に優れた戦略がなかったために、本来ならば中原地帯であるべき滑台がほかならぬ国境線（最前線）になってしまったこと、つまり華北の地を回復できなかったことをいう。続く二句、北伐という軍事行動に結果が出ず、山河も堅固な自然の要害[24]となりえなかったことをいう。この六句は滑台にまつわる懐古をうたう。

なおここに詠まれたことに当たるような記事を、試みに『資治通鑑』晉紀十二（巻九十）から宋紀十六（巻一三四）つまり東晉・劉宋部分で調べてみると[25]、次のようなものがあった。まず東晉の太元八年（三八三）、華北を制圧した前秦が東晉を攻撃するも肥水の戦いで大敗を喫し、翌九年、東晉は北伐して河南を制し洛陽を奪還するが、その際に滑台も占拠している（巻一〇五）。なお東晉軍は翌十年に撤退。また前秦の大敗によって華北はふたたび混乱状態に陥る。次に隆安二年（三九八）慕容徳が滑台において燕（南燕）を名乗ったが、翌年、配下の将軍・符広が反したことが契機となって、滑台は北魏の手に落ちてしまう（巻一一〇・一）。ちなみに拠り所の滑台を失った南燕は、のちに広固（山東省淄博市東）に拠って国を維持するが、義熙六年（四一〇）に、劉裕の北伐によって滅ぼされる。次に義熙十二年、劉裕による北伐の時、東晉の王仲徳の水軍が滑台を攻め、北魏の尉建は滑台を棄てて逃れた（巻一一七）。なお翌年、劉裕は長安を陥れ、後秦を滅ぼし、さらに永初元年（四二〇）帝位につく（劉宋）。永初三年、北魏の奚斤らが滑台を急襲して攻め落とし、劉宋の王景度は滑台を棄てて逃がれ、滑台は再び北魏の手に落ちてしまう（巻一一九）。文帝の元嘉七年（四三〇）、文帝は河南回復のため北魏攻撃を到彦之・王仲徳らに命ずる。北魏は軍略上一度滑台を放棄し、滑台は劉宋の手に戻るが、北魏は再び滑台を攻撃する。翌八年、北魏の安頡・司馬楚之が滑台を攻め落とす（巻一二一・二）。なおこの年、北魏は、関中全域を占領する。以後ずっと、滑台は北魏の領有となる。なおしばらくして、元嘉二十七年の北伐において、劉宋軍が滑台を攻めたが、魏に撃退されてしまう（巻一二五）。

さて詩に戻って、十二句目、「遊寓」は他郷に宿る生活。十六句目、寒い季節を迎えて数え切れないほどの雁が、南方、つまり心地よきところへと帰ってゆくのを見て、十七句目、高適も故郷へ帰る気持ちをつのらせる。「方に」とあるのは、雁に触発されて、就職活動のうまくいかないこの土地を去る決心が「いまはじめて」ついたという気持ちを示すものであろう。なお飛ぶ雁を数え切れないとするのは迫力のある表現であり、また珍しいとも思われる[26]。最後の十八句目、其八にも「雲沙　前後無し」とあった「雲沙」（空の雲と黄河の砂岸）が、ここでは「迴互（うねうねめぐり混じりあう）」し、帰途の遙けさを強調していよう。なお高適の帰る先は生まれ故郷ではなく、長い間寓居していた宋州の宋城を意識していよう。

なお劉氏『箋注』は其六をここに置くが、彭氏「考証」は連作が全て夏の景を描写する中でこの作品だけが秋の景であることから、これだけを連作から除外している。しかし其十一で見たように淇上を初夏に出発して滑台に至り、滑台に秋のくれ頃まで就職活動のために滞在したと考えてもよかろう。ただ連作のひとつとするならば、滑台到着後しばらく時間がたっての作であり、その点で「自淇渉黄河途中作」という詩題とそぐわないという問題が出てくるが、いまは連作の中に数えることとする。

其七

1亂流自茲遠、2倚櫪時一望。3遙見楚漢城、4崔嵬高山上。
5天道昔未測、6人心無所向。7屠釣稱侯王、8龍蛇爭霸王。
9緬懷多殺戮、10顧此增慘愴。11聖代休甲兵、12吾其得閑放。

（1亂流　茲自り遠く、2櫪に倚りて時に一望す。3遙かに楚漢城を見れば、4崔嵬たる高山の上なり。5天道　昔　未だ測らず、6人心　向う所無し。7屠釣　侯王を稱し、8龍蛇　霸王を爭う。9緬かに殺戮の多きを懷い、10此れを顧みて增ます慘愴たり。11聖代は甲兵を休む、12吾　其れ閑放を得たり。）

二・三句目より、高適は「楚漢城」をその眼に遠望できる場所にいることがわかる。さてその楚漢城について彭氏「考証」は、『元和郡縣圖志』（巻八）河南道四・鄭州・滎澤縣「東廣武、西廣武二城、各在一山頭、相去二百餘歩、在縣西二十里。漢高祖與項羽俱臨廣武而軍、今東城有高壇、即是項羽坐太公於上、以示漢軍處。」により、東広武城・西広武城としている。つまり楚漢城は滎沢県（鄭州市北）西にある二つの山の頂上にある城の総称ということになる。なお楚漢城の比定は以後の諸注釈もこれを襲っている。また『元和郡縣圖志』に相当する記事を『史記』（巻七）項羽本紀と三家注で見れば次の通りである。「漢王則引兵渡河、復取成皐、軍廣武、就敖倉食。項王已定東海來、西、與漢俱臨廣武而軍、相守數月。」『集解』「孟康曰、於滎陽築兩城相對爲廣武、在敖倉西三皇山上。」『正義』「括地志云、東廣武、西廣武在鄭州滎陽縣西二十里。戴延之西征記云、三皇山上有二城、東曰東廣武、西曰西廣武、各在一山頭、相去百歩。汴水從廣澗中東南流、今涸無水。城各有三面。在敖倉西。郭緣生述征記云、一澗横絶上過、名曰廣武。相對皆立城塹、遂號東西廣武。」なお『漢書』（巻一上）高帝紀上・『資治通鑑』（巻十）漢紀二に付された「廣武」に関する顔注・胡注も『史記』注の域を出ていない。[27] さて右にあげた史料には、肝腎の「楚漢城」という語が出てこない。では彭氏が右のように比定した根拠は奈辺にあるのか。推測するに彭氏は、この「楚漢城」を楚の城・漢の城と解釈し、楚（項羽）と漢（劉邦）にまつわる滑台や淇水の近くの黄河沿いの土地の記述として、『元和郡縣圖志』の東西広武二城の記事をここにあてはめたのではなかろうか。[28] また本稿のはじめに紹介した、高適が滑台を出て黄河を滎沢県あたりまで遡ってきたという彭氏・劉氏の説は、ひとえに右の比定によっている。[29]

ただ「自淇渉黄河途中作」という詩題と、両氏の説は少し齟齬を来すようにも思われる。現在論者は「楚漢城」という語、あるいは楚城・漢城二城にまつわる他の適切な記述を史料に見いだしておらず、両氏の説を訂正できる準備がない。ここでは、楚漢城あるいは楚城・漢城に関わる故事の場が淇水から滑台までの行程にあるならば、両氏の説は変更を迫られるという可能性のみを示し、ひとまず両氏に従っておくこととする。

さて五・六句目、秦末人々がどの有力者についてよいのか決めかねていた混乱した時世、七句目、犬肉屋・樊噲は舞陽侯となり（『史記』巻九五）、淮陰城下で腹をすかせて釣りをする姿を綿をさらすばあさんに哀れに思われ飯をめぐんでもらった韓信が斉王・淮陰侯となった（『同』巻九二）ように、身分の低い者も立身出世できるチャンスがあ

ったことをいう。八句目は、劉邦と項羽に代表される、それまでは身を潜めていた「龍蛇（非凡の者）[30]」が天下を争ったことをいおう。続く四句、当時の争いでは多くの人が殺戮されたのに対して、いまの御代は平和であり、私（高適）ものんびりできるという、玄宗皇帝への感謝を述べて終わる。ただ敢えて深読みするならば、これは手放しの感謝ではあるまい。高適が置かれている失意の状況を鑑みた場合、ここには、身分の低い者や身を潜めていた実力者が、王侯となりまた天下を争うことができたという、自身の才能を存分に発揮できるチャンスに恵まれた時代への羨望も読み取れよう。確かに、九・十句目、其十二の「力争　固より恃み難し、驕戰　曷ぞ能く久しからん。」と同様、力頼みの無用な殺戮は否定しているが、その一方で、チャンスに恵まれない現在の状況を嘆くという複雑な感情を看取できるのではあるまいか。ちなみに安禄山の乱勃発後の高適の軍事的な知略や功績そして栄達は、はからずもこの詩で羨望したチャンスを自らうまくつかんだ結果である。

其十三

1皤皤河濱叟、2相遇似有恥。3輟榜聊問之、4答言盡終始。5一生雖貧賤、6九十年未死。7且喜對兒孫、8彌慚遠城市。9結廬黄河曲、10垂釣長河裏。11漫漫望雲沙、12蕭條聽風水。13所思強飯食、14永願在鄉里。15萬事吾不知、16其心只如此。

（1皤皤たる河濱の叟、2相遇いて恥有るが似し。3榜を輟めて聊か之に問えば、4答言　終始を盡くす。5一生　貧賤たりと雖も、6九十　年　未だ死なず。7且つ喜ぶ　兒孫に對するを。8彌いよ慚ず　城市に遠ざかるを。9廬を結ぶ　黄河の曲、10釣を垂る長河の裏。11漫漫　雲沙を望み、12蕭條　風水を聽く。13思う所は飯食に強むるなり、14永く願う　鄉里に在るを。15萬事　吾知らず、16其の心　只だ此の如し。）

黄河のほとりに暮らす「皤皤（髪の毛が白い）」の老人と遇っての作。二句目の「有恥」は、『論語』子路篇の「子貢問曰、何如斯可謂之士矣。子曰、行己**有恥**、使於四方、不辱君命、可謂士矣。」（『集解』「孔曰、有恥者、有所不爲。」）を典故とし、また吉川幸次郎『論語（中）』（一九七八年、朝日新聞社）の解釈には「自分の行動に対して、その行動が、羞恥を生むものであるかないかを吟味し、羞恥を生む行動は、しない。つまり有恥とは無恥の反対である。……そうであってこそ、「士」と評価してよろしい。」とある。つまりここの老人は、自分の行動が羞恥を生まないように律し、隠者としても「士」たる規範を失っていない人物として描かれている。三・四句目、高適の問いに対し、老人は委細つつみかくさず話してくれた。以下はその答え。五・六句目は、『列子』天端篇の「孔子遊於太山、見榮啓期行郕乎之野、鹿裘帶索、鼓琴而歌。孔子問曰、先生所以樂、何也。對曰……人生有不見日月、不免襁褓者、吾既已**行年九十**矣。是三樂。**貧者**士之常也、死者人之終也。處常得終、當何憂哉。」に拠ろう。八句目の「慚」は、ひとまず「かんず」と訓み、その意味はありがたく感じると解したい[31]。子や孫に囲まれ、釣りを楽しみ、雲砂を眺め風や水の音を聞き、食事にのみ心がけ、生まれ故郷に住み続け、世の中ことに全く関心を持たない。俗世に背を向けて暮らす老人の様子は、老人の言葉のみによって描かれ、それに対する高適の評価は見られない。其三で「野人」を描いたのと同様、突きはなしたような第三者的描写となっていることが注意されよう。

なおこの詩の配列については決め手に欠ける。敢えていうならば、十二句目の「蕭條聽風水」という表現が秋や冬を連想させるが、これも老人の言葉の中の表現であるので、強い根拠とすることはできない。連作の詩題と、前掲其七が淇水から滑台間の作である可能性も否定できないということとを考え合わせ、この其十三も淇水から滑台の行程での作品と、ひとまずしておきたい。

＊

以上、前稿で紹介できなかった「自淇涉黄河」詩の紹介を試みた。またあわせて、彭氏・劉氏による十三首の配列も再検討してみたが、論者の試案では、厳密な配列ではないが、其一・十一・二・三・五・八・十二・十三（ひとまずここに置く）・十・九・四・六・七となる。[32]

〔注〕

（1）「淇上の高適（上）」「同（下）」（『山口県立大学国際文化学部紀要』六・七、二〇〇〇年・二〇〇一年）。以下、前稿とよぶ。

（2）『英華』に載せるのは、順に其九・八・十三・十一・四。

（3）高適集の版本については、孫氏『校注』所収「高適集版本考」参照。

（4）なお以下、作品の検討に当たっては、高適詩の諸注釈を参考にしている。諸注釈については、拙稿「高適研究の現状と展望」「高適研究論著目録」（『中国学志』屯号・大有号、一九八八年・九九年）を参照されたい。

（5）ここでは、例えば、『文選』（巻十一）の王粲「登樓賦」の「平原遠而極目兮、蔽荆山之高岑。」を直接うけ、王賦同様、故郷を「極目」していたのだと限定的に解釈するようなことは避けた方がよいと思われる。

（6）拙稿「高適の離別詩について」（『中国学志』蒙号、一九八九年）・「高適の不遇感の諸相」（『山口女子大学文学部紀要』二、一九九三年）参照。なお高適が懐才不遇の自己をおおとりに形象する例としては、ほかに「別董大二首」其二「六翮飄颻私自憐、一離京洛十餘年。丈夫貧賤應未足、今日相逢無酒錢。」（八〇頁）があり、ここでも「六翮（おおとり）」が「飄颻（空を飛ぶ）」してることに注意してよいであろう。

（7）『唐代交通図考・第五巻・河東河北区』（中央研究院歴史語言研究所専刊之八十三、一九八六年）「唐代河陽以東黄河津渡河北平原交通合図」

（8）『讀史方輿紀要』（巻四八）河南三・河南府・孟津縣・回洛城「隋大業二年、於其地置回洛倉。倉城周迴十里、穿三百窖。」

（9）高適の目睹した李密の伝記史料には敖倉の記述があったのかもしれない。なお敖倉については『史記』（巻七）項羽本紀「漢軍滎陽、築甬道屬之河、以取敖倉粟。」『集解』「瓚曰、敖、地名、在滎陽西北山、臨河有大倉。」『正義』「括地志云、敖倉在鄭州滎陽縣西十五里、縣門之東北臨汴水、南帶三皇山、秦時置倉於敖山、名敖倉云。」とある。迴洛倉とは別の場所。

（10）譚其驤主編『中国歴史地図集』第五冊「隋・唐・五代十国時期」（一九八二年、地図出版社）では、洛口と洛口倉とはごく近くにあるが別の場所としているようである。

（11）『隋書』（巻三十）地理志中・河南郡・鞏「後齊廢、開皇十六年復。有興洛倉。……」『新唐書』（巻三八）地理志二・河南道・河南府・鞏「畿。有洛口倉。」『讀史方輿紀要』（巻四八）河南三・河南府・鞏縣・洛口倉城「在縣東。隋大業二年、于鞏東南原上築倉城。周迴二十餘里、穿三千窖、窖容八千石。**亦曰興洛倉**。……」

（12）「嘗欲尋包愷、乘一黄牛、被以蒲韉、仍將**漢書**一帙掛於角上、一手捉牛靷、一手翻卷書讀之。尚書令越國公楊素見於道、從後按轡躡之、既及、問曰、何處書生、耽學若此。密識越公、乃下牛再拜、自言姓名。又問所讀書、答曰、**項羽傳**。越公奇之、與語大悦……」（一九八五年、彙文堂書店）。

（13）『杜牧の研究』「杜牧の詠史詩について」

（14）「無前後」は、高適の「送渾將軍出塞」（二〇四頁）にも「黄雲白草無前後、朝建旌旄夕刁斗。」と見える。

（15）『水經注』（巻九）淇水「淇水又南、歴枋堰、舊淇水東南流、逕黎陽縣界南入河。地理志曰、淇水出共、東至黎陽入河。溝洫志曰、

遮害亭西一十八里至淇水口是也。漢建安九年、魏武王于水口、下大枋木以成堰、遏淇水東入白溝、以通漕運。故時人號其處爲枋頭。」『元和郡縣圖志』（巻十六）河北道一・衞州・衞縣「枋頭故城、在縣東一里。建安九年、魏武帝在淇水口、下大枋木爲堰、遏淇水令入白渠、以開漕運。故號其處爲枋頭。」

(16) 「自淇涉黄河」詩其六「獨行既未愜、懷土悵無趣」。「淇上酬薛三據兼寄郭少府」（七一頁）「獨行備艱險、所見窮善惡」は第一次薊北行の回想。また天宝四載秋、東平への途中の作「魯郡途中遇徐十八録事」（一三七頁）には「獨行豈吾心、懷古激中腸。」と上句に同様の表現が見られる。「秦中送李九赴越」（二一二頁）「愁霖不可向、長路或難前。吳會獨行客、山陰秋夜船。」は、天宝十一載秋、長安にての作。独行の客・李九の旅立ちは前途洋々たるものではない。なお作品系年は孫氏『校注』所収「高適年譜」による。

(17) 注(6)拙稿「高適の不遇感の諸相」参照。

(18) 末二句の出典は、『列子』楊朱篇「昔人有美戎菽・甘枲・莖芹・萍子（あまり人が食べないもの）者、對鄉豪稱之。鄉豪取而嘗之、蜇於口、慘於腹、衆哂而怨之、其人大慙」・嵇康「與山巨源絶交書」（『文選』巻四三）「野人有快炙背而美芹子者、欲獻之至尊、雖有區區之意、亦已疏矣。」なお前稿で、末二句を高適の献策の道がないとしたが、改める。

(19) 『王維研究』第十二章「自然」（一九七六年、創文社）

(20) 『述征記』は、『隋書』（巻三三）經籍志二・史・地理に「述征記二巻（宋）郭緣生撰」とある。佚書。

(21) 本文は、三氏所引に従う。論者が目睹した文海出版社影印本（一九八〇年）は「王莽嶺冠」を「王莽領冠」に作る。嶺・領は通ずるが、冠は誤りであろう。

(22) 四庫全書本の十二首の配列は、本稿の底本とは同じではないが、其九以下其十二までは同じい。そこまでの配列は、其一・七・二・三・六・四・八・五である。

(23) あるいは引用した『史記』記述の冒頭と関連する『漢書』（巻二五上）郊祀志上「（文帝の時）丞相張蒼好律曆、以爲漢乃**水德**之時、河決金隄、其符也。」も響いていよう。

(24) 『史記』（巻六五）呉起列傳「魏文侯既卒、起事其子武侯。武侯浮西河而下、中流、顧而謂吳起曰、美哉乎山河之固、此魏國之寶也。」

(25) 『通鑑』の検索は台湾・陳郁夫氏のオンラインデータベース「寒泉」を使用しました。記して感謝致します。

(26) 唐詩までをざっと見渡したところ類似の描写としては、高適「酬李少府」（四一頁）「來雁無盡時、邊風正騷屑。」・李益「春夜聞笛」（『全唐詩』巻二八三）「洞庭一夜無窮雁、不待天明盡北飛。」・馬戴「灞上秋居」（『同』巻五五五）「灞原風雨定、晚見雁行頻。」があった。

(27) 『漢書』顔注は孟康注を引き、『通鑑』胡注は『史記』注と同じい。

(28) 『讀史方輿紀要』（巻四七）鄭州・河陰縣・廣武山に「今東廣武亦曰**楚王城**、西廣武亦曰**漢王城**。」とある。また『古今圖書集成』方彙編山川典（巻五一）廣武山部にも二城を楚王城・漢王城とする記述がある。

(29) なお厳密に言えば、本文所引の劉宋・孟康注や唐・李泰等『括地志』では、滎沢ではなく滎陽（鄭州市西）とし、劉氏『箋註』も滎陽の広武城まで至ったとする。彭氏の滎沢とずれについては待考。

(30) 『易』繫辭傳下「尺蠖之屈、以求信也。龍蛇之蟄、以存身也。」・『春秋左氏傳』襄公二十一年「深山大澤、實生龍蛇」杜注「言非常之地、多生非常之物。」また『史記』（巻八）高祖本紀「（高祖）父曰

太公、母曰劉媼。其先媼嘗息大澤之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥、太公往視、則蛟龍於其上。已而有身、遂産高祖。高祖爲人、隆準而龍顔、美須髯、左股有七十二黒子。」の記述も響いていよう。

(31) 張相『詩詞曲語辞匯釈』(一九七九年・中華書局版による)「慚愧、慚愧」の項に「慚愧、感幸之辞、猶云多謝也、僥倖也、難得也。」、また江藍生・曹広順『唐五代語言詞典』(一九九七年、上海教育出版社)「慚」の項に「感念、感激。」とある。

(32) 高文・王劉純『高適岑参選集』(一九八八年、上海古籍出版社)は、十三首を一・二・三・十二・八・五・七・十・九・十一・四・六・十三と並べる。紙幅の都合で私案との相違を検討できないが、私案の根拠は論中で述べたので、それを以て検討にかえる。

(中国文学)